

建築主：慶應義塾 安西祐一郎  
 設計者：清水建設株式会社 北村佳久、中川健太郎、吉田郁夫  
 施工者：清水建設株式会社 加藤喜久



外観写真（撮影：松岡満男）

## 建築概要

建設地：神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1  
 建築主：学校法人慶應義塾  
 設計：清水建設株式会社一級建築士事務所  
 施工：清水建設株式会社建築事業本部  
 竣工：2002年1月  
 建築面積：4,286.04㎡ 延床面積：18,606.28㎡  
 階数：地上7階、地下なし、高さ：30.95m  
 構造種別：鉄骨造（柱CFT造）

## 選評

慶應義塾大学 日吉 来往舎は塾内外の多様な人材が参加連携し、活発な交流によって斬新な「知の創造」を行うことをコンセプトとし、建物は7層吹き抜けのアトリウムを中心に研究室などの諸室が取り囲み、ブリッジやピロティなどの仕組みを効果的に導入して、明るく、開放的な空間づくりを目指した施設です。

しかし、このような構成の建物は今までにも数多く作られてきましたが、構造的に偏心（ねじれ）が生じやすい架構であるため、架構が巨大化したり、構造壁が必要となったりと建物の足元を開放的にするためには大変困難を伴い、太い柱や動かない壁に甘んじてきました。その中で、本建物では免震構造を採用することにより、上部構造のねじれを約1/2程度に抑え、研究個室群を軽やかな柱で浮遊させ、構造壁のない見通しの利いた、開放的な空間を作り出すことに成功しています。

これは、免震構造の採用が安全性の確保という目的だけではなく、建築計画の手法として可能性をさらに拡大させたことを意味します。

この作品は、自然環境の利用から細部のディテールまできめ細かく配慮された質の高い出来栄であるとともに、建築作りの可能性をさらに発展させたことにより、作品賞に値する作品と評価したいと思います。

（石原 直次）

## 免震化した経緯及び企画設計等

来往舎は、教養研究の発信の基点となる研究センターであり、塾内外の多様な人材が主体的に参加・連携し、活発な交流によって斬新な「知の創造」を行うためのシンボル施設として構想された。「交際する空間」というコンセプトのもとに、アトリウムを中心とした開かれた空間づくりをめざし、免震構造の採用により細柱で建物を浮遊させ、外部と一体感ある開放的なピロティを実現した。また、本建物は日吉キャンパスの防災拠点となるべく、地震時の安全性と機能維持が求められた。

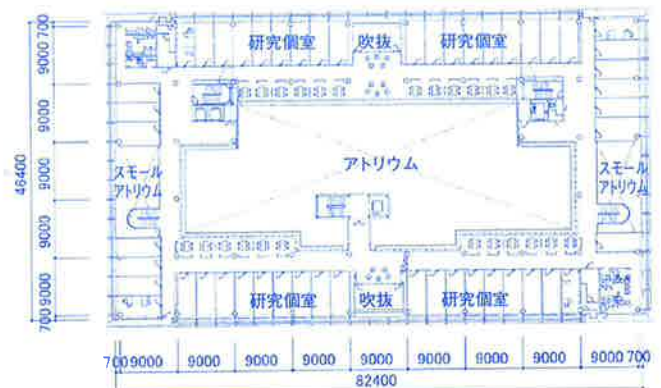
## 技術の創意工夫、新規性及び強調すべき内容等

建物中央部に大きなアトリウムをもち、下層の片側がピロティ形式となっている偏心の大きい開放的な建物にスリムな断面で高い耐震性を持たせることが設計上の課題であった。

免震構造は上部建物の偏心が大きくても、免震層に偏心がなければ大きなねじれ振動は生じないとされているが、本建物は免震構造の利点を最大限に活用し、すべり支承を効果的に用いることにより免震層の偏心を抑えるとともに、オイルダンパーの併用により建物の応答を小さくしている。上部構造には、耐力の大きいコンクリート充填鋼管柱を採用するとともにアンボンドブレースにより剛性を高めている。これにより、大地震後の機能維持を確保しつつ、開放的で魅力ある空間を実現することができた。



アトリウム全景（撮影：松岡満男）



基準階平面図